

# 教科における基礎学力の育成を目指して

教育課程編成研究会議

葉倉 朋子<sup>1</sup> 上杉 忠司<sup>2</sup> 鈴木 真由美<sup>3</sup> 山田 義弥<sup>4</sup> 小池 優一<sup>5</sup>  
白井 理<sup>6</sup> 前島 和樹<sup>7</sup> 吉田 和江<sup>8</sup> 大串 一彦<sup>9</sup>

## 要 約

新学習指導要領が全面実施された2002年度から、子どもたちに「生きる力」をはぐくむための新しい教育が展開されている。多くの情報が氾濫する中、目の前の子どもたちに力強く未来を生きていく力を育てるための、川崎の教育の在り方を考える資料を提供したいと考える。

そこで、2002年11月に川崎市内の全小学校・中学校・高等学校、聾養護学校を対象に、学力についての意識や実態の調査を行った。「学力の推移についての感じ方」の調査からは、学力には「表現する力」「コミュニケーション能力」などに伸びがみられる一方で、「読み書き計算」「健康や体力」など不足を感じるものがあることがとらえられた。従来からの知識・理解に力点を置いた学力という意味においては低下が感じられるが、他方では、時代の変化に応じた新しい学力が育ってきていることが分かる。また、「新しい学力観」(1989年)で重視してきたにもかかわらず、多くの教員が感じている学習への意欲の低下をどのようにくい止めていくかということも、大きな課題である。このことから、『これから求められていく学力について整理する必要性』と『これから求められる学力を見据えた教科指導について考えていく必要性』をとらえた。そこで、本研究会議では、「生きる力」と学力の構造を整理し、教科における基礎学力に焦点を当て、教科における基礎学力は、「知識を獲得する力(資質・能力)」と、そこから「獲得される知」との相互関係の中にあると考えた。

さらに、教科における基礎学力を支えるものとして、根気強さや集中力などの学習力の育成をも図っていく必要があると考え、教科における基礎学力について整理した。

キーワード：学力の推移，意欲の低下，教科における基礎学力，資質・能力，獲得される知，学習力

## 目 次

主題設定の理由	6	(3)具体的な教科における基礎学力	
研究の内容	6	について	12
1. 学力について	6	4. 教科の基礎学力を支えるもの	16
(1)学力は実際に低下しているのか	6	5. 相互に育成するものと生きる力	18
(2)学校にせまる課題	9	(1)総合的な学習の時間と	
2. 生きる力と学力の構造	10	教科の関係	18
3. 教科における基礎学力の育成	11	(2)総合的な学習の時間の評価	19
(1)教科における基礎学力とは	11	研究のまとめ	20
(2)資質・能力の育成と知識の		参考文献	20
獲得の仕方	12	指導助言者	20

<sup>1</sup> 教科教育研究室(指導主事)   <sup>2</sup> 障害児教育研究室(研修指導主事)   <sup>3</sup> 教育課題研究室(研修指導主事)

<sup>4</sup> 生涯学習研究室(研修指導主事)   <sup>5</sup> <sup>6</sup> <sup>7</sup> <sup>8</sup> 教科教育研究室(研修指導主事)   <sup>9</sup> 情報教育研究室(研修指導主事)

## 主題設定の理由

新学習指導要領が全面実施された 2002 年度（高等学校は 2003 年度から学年進行で実施）、各小・中学校等においては、子どもたちに生きる力をはぐくむための新しい時代の教育が展開されている。

一方、時を同じくして学力低下についての論議が浮上してきた。多くの情報が氾濫する中、目先の情報に流されることなく、私たち学校現場に携わるものとして、学力とは何かを改めて考える必要性があるだろう。

21 世紀を担う子どもたちに求められる学力とは何か。そのために、学校教育に直接携わる私たちは、何をどのように考え、実践していけばよいのか。目の前で、日々育ちゆく子どもたちをしっかりと見つめながら、力強く未来を生きていく力を育てるための川崎の教育の在り方について考える資料を提供していきたい。

当センターでは、平成 12 年度に『総合的な学習の時間で培う力』についての指導主事研究を行い、「総合的な学習の時間で培う力の重要性」と「小・中学校における培う力の系統性」を例示した。

平成 13 年度には、それを受け『総合的な学習の時間と教科の関連』について資質・能力に着目した研究を行った。

そこでは、「総合的な学習の時間と教科の関連を図ること」の必要性と、特に「資質・能力を関連させていくためには、教科で育成する力を明確にすることとそれを確実に育成していくこと」の重要性について考察した。

そこで、今年度は、学力についての考え方を整理するとともに、教科で育成する力を明確にし、それを確実に育成するための研究について深めることにし、下記のような研究主題を設定した。

（研究主題）

教科における基礎学力の育成を目指して

## 研究の内容

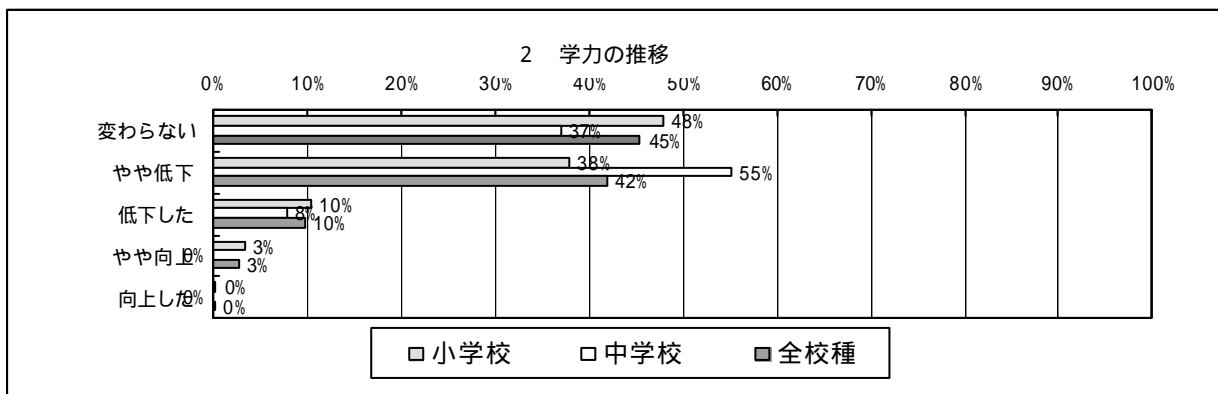
### 1. 学力について

#### （1）学力は実際に低下しているのか

川崎市総合教育センターでは、2002 年 11 月に川崎市内の全小学校 114 校、全中学校 51 校、全高等学校全日制・定時制 10 校、聾養護学校 3 校を対象に、学力についての意識や実態の調査を行った。調査は、授業をもっている教務主任等の学校代表者 1 名と、小・中学校各 4 校の抽出校で授業をもっている全教員を対象として実施した。（ここでは、小学校、中学校に焦点を当てて実態を述べていく。）

まず、「学力の推移についてどのように感じているのか」についてたずねてみた。

【 この 5～6 年間を考えた学力の推移についての感じ方 】



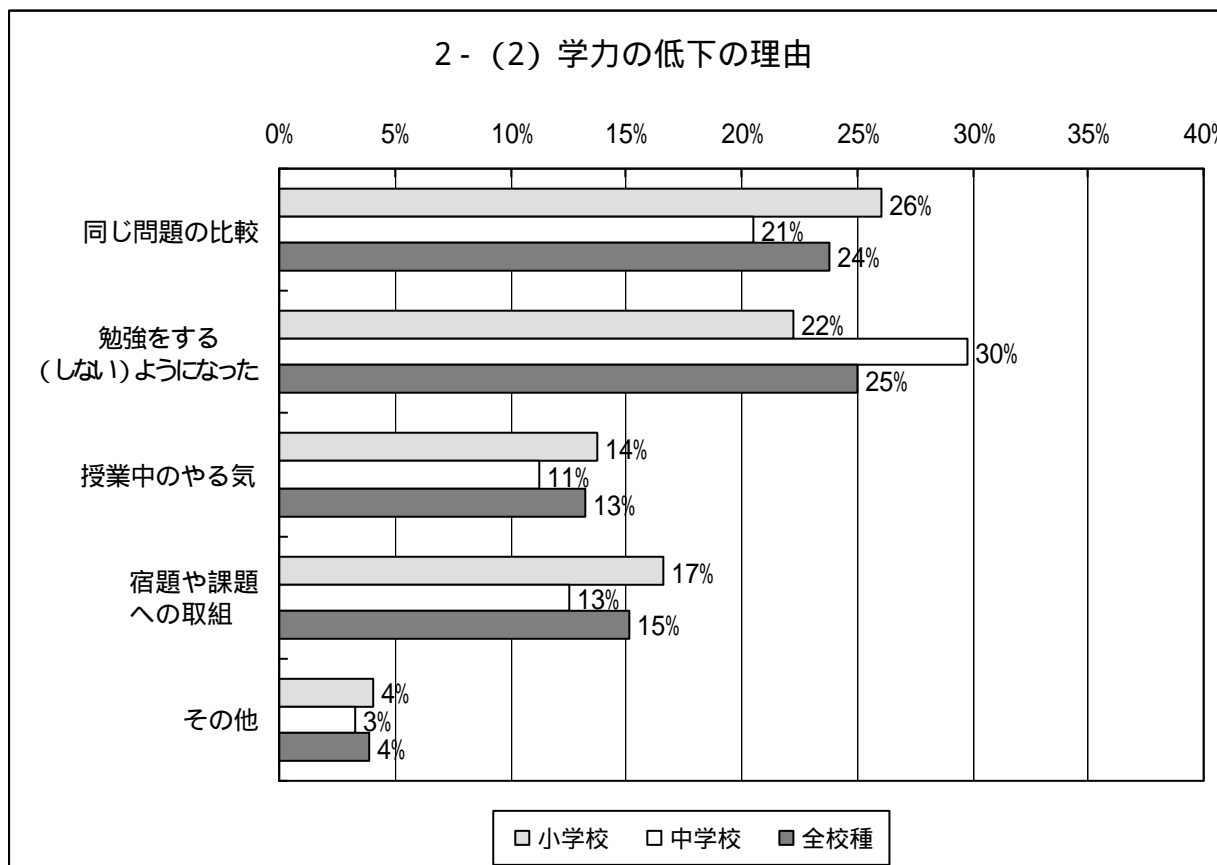
この5～6年間の学力の推移の感じ方については、小学校、中学校においてある程度の差はあるが、全体として45%が「それほど変わらない」と答えている。「どちらかというと向上したと思う」は3%、「向上したと思う」は0%であった。一方、「どちらかというと低下したと思う」42%、「低下したと思う」が10%あり、合わせると52%が学力の低下を感じている。

この結果から、やや低下したと感じている人が多いことがとらえられる。しかし、その差は少なく、学力は一定水準を保っていると感じる人たちと、低下していると感じている人たちが、約半数ずついる現状がある。このように感じ方が分かれたのはなぜであろうか。その理由の一つは、学力のとらえ方の違いにもあるように思う。

一般にいう学力というとは、一定のものなのだろうか。自由記述の中には、「学力について、従来の考え方と同じ物差しで測ることができないのではないか」や「学力のとらえ方によって低下したとも、変化したともいえる」などの声がある。学力は、「低下している」のか、それとも「変化している」ととらえるべきなのだろうか。

そこで、低下したと感じている人たちは、「どこから感じたのか」について聞いてみた。

【 低下したと答えた人たちは、それをどこから感じたか 】

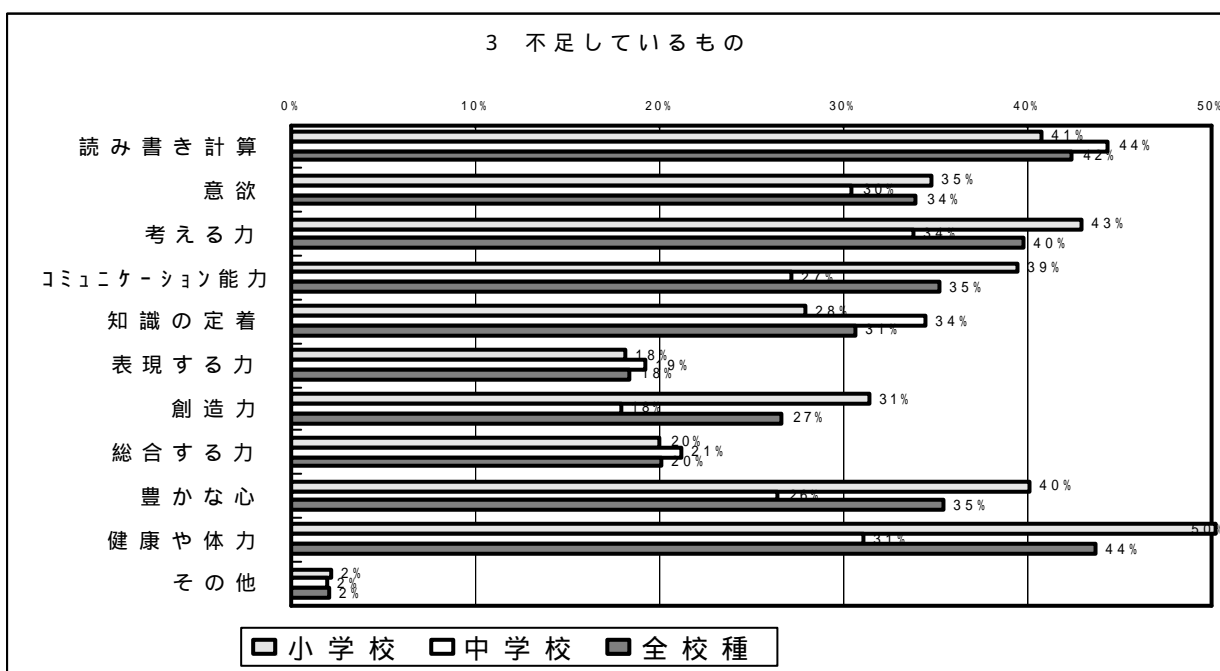
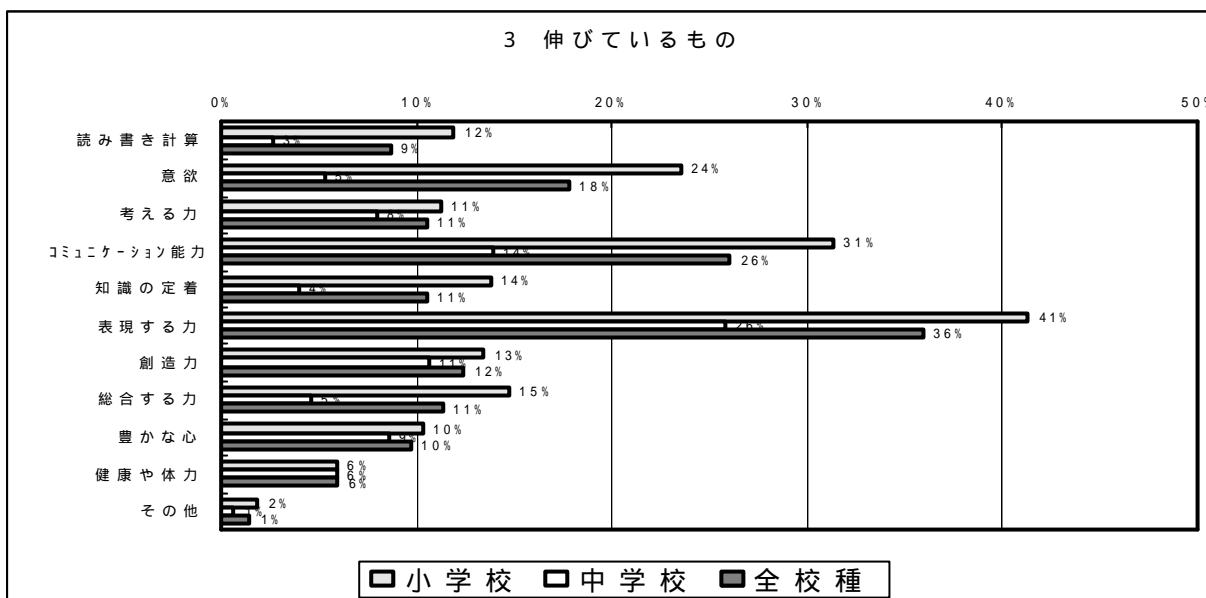


調査対象の全体の約半数を占める人たちが、「低下している」と感じたところは、「勉強をしなくなった」31%と「以前に比べて同じような問題ができなくなっている」29%である。

低下したと感じている人たちの多くは、「同じ問題の比較」という視点と「勉強への意欲」という視点で、学力の推移をとらえていることが分かる。

次に、「伸びていると思うもの」と「不足していると思うもの」のグラフを見てみたい。

【 伸びているものと不足していると思うもの 】



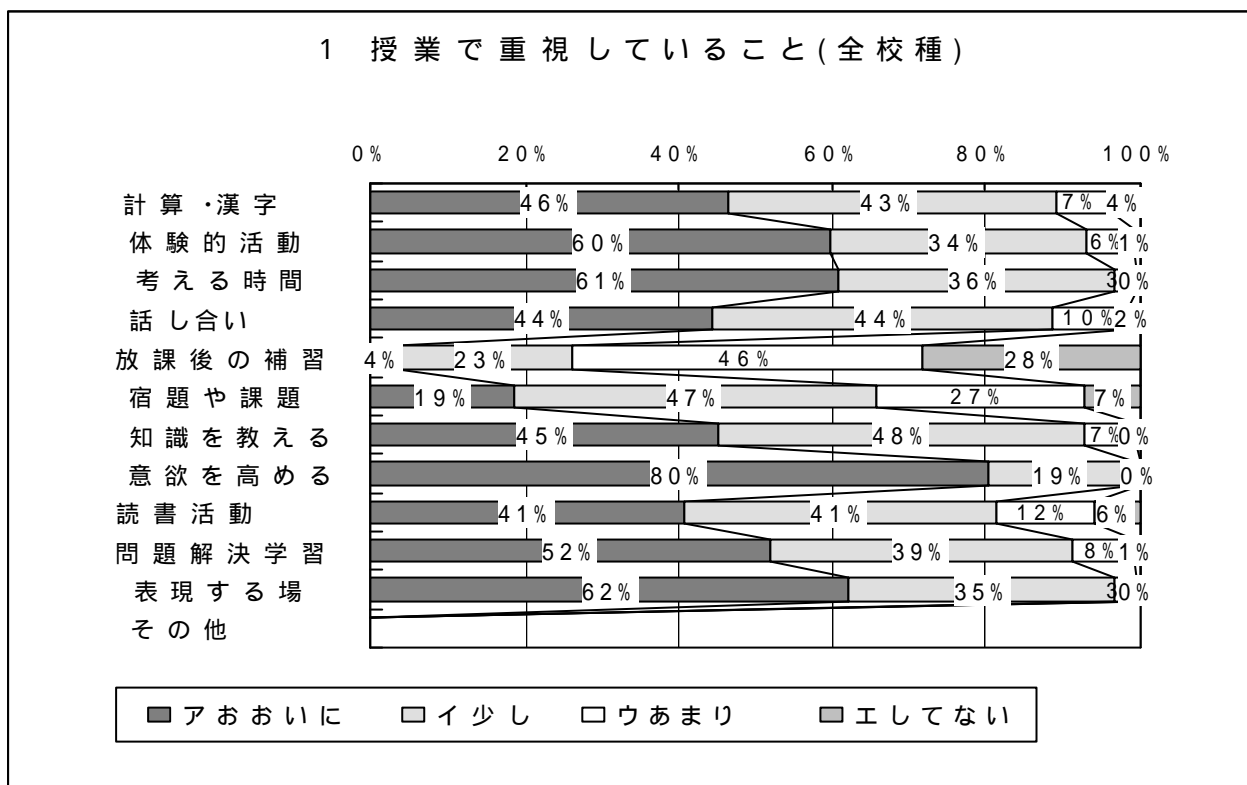
伸びていると思うものとして挙げられているものは、小・中学校ともに「表現する力」「コミュニケーション能力」の順である。ここから、自分の思いや考えを表現したり、相手の思いや考えを受け止めて、やり取りをしたりしていくという新しい発信型の力の伸びがとらえられる。

一方、不足していると思うものとしては、「読み書き計算」「健康や体力」の順になっている。

これらのことから考えると、確かに従来から大切にされてきた学力については低下が感じられるが、他方では、時代の変化に応じた新しい学力が育ってきていることが分かった。

学力観の変化や子どもの学力の変化を受け、教員は日々の授業の中でどのようなことを大切にしているのだろうか。調査の「学力の定着を目指して、授業を行う中で重視していること」については、次のような結果が出ている。

【 学力の定着を目指して授業を行う中での重視の程度について 】



このグラフを見ると、小・中学校ともに重視しているものの上位は、「意欲を高める」「考える時間をしっかりとる」「表現する場を設ける」の順になっている。

授業を行う中で、学習の意欲を高めることを第一に考えていることが分かる。合わせて、思考力や表現力などの新しく求められている力も重視しようとしていることがとらえられる。

(2) 学校に迫る課題

別紙の調査結果も参考にしながらまとめてみると、次のようなことがいえるだろう。

一つには、これから求められていく学力について整理する必要があるということである。

学力の推移については、低下しているという意見と、一定水準を保っている、さらに一部には向上しているという意見もあった。

特に、「表現する力」や「コミュニケーション能力」が伸びているという調査結果が注目される。さらに、自由記述の中には、「情報活用能力、問題解決能力が伸びている」といった声もある。一方、従来型の学力の中心をなす「読み書き計算」や「健康や体力」などの不足もとらえられている。前回の学習指導要領改訂で示された、関心・意欲・態度を基盤とした「新しい学力観」(1989年)が形をなしてきたともいえるだろう。つまり、学力が低下したかどうかは、何を学力としているかによって、とらえ方が違うということである。

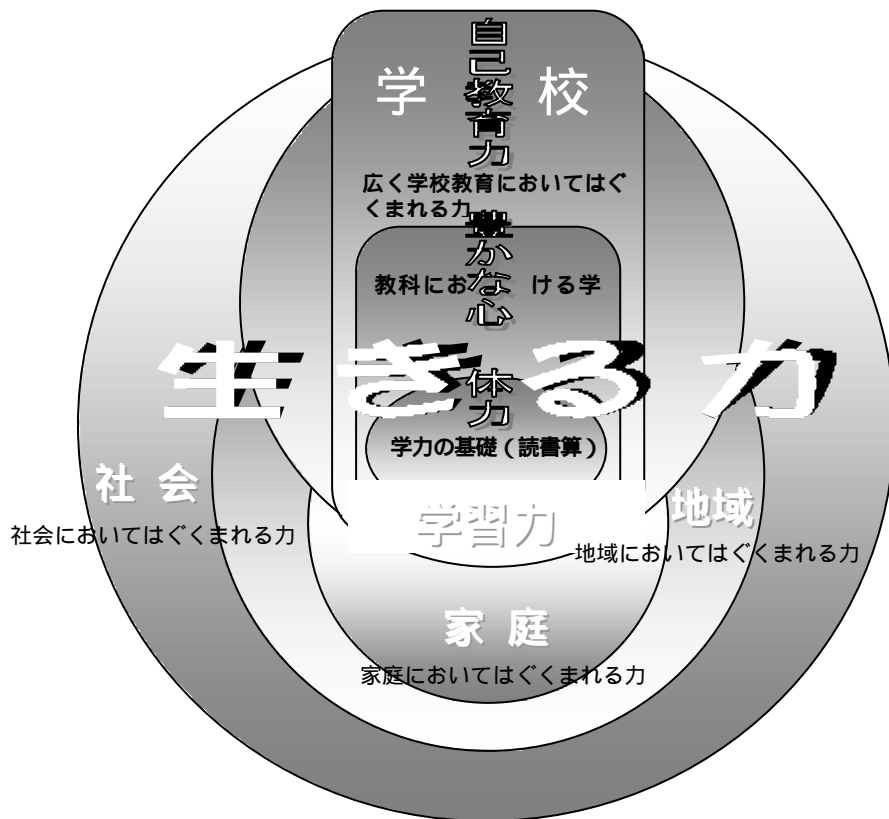
もう一つには、これから求められる学力を見据えた教科指導について考えていく必要があるということである。

「新しい学力観」では、意欲や関心を重視したにもかかわらず、多くの教員は学習意欲の減退を感じているのである。子どもたちの学習への意欲の低下をどのようにくい止めていくか。これからの未

来を力強く切り開いていくためにも、心豊かに世界の人たちと共存していくためにも、意欲の減退は非常に大きな問題である。また、「学力の定着がしにくいものの原因」についての調査では、「学ぶ意欲の低下」とともに、「勉強に向かう姿勢や態度・習慣」「資質・能力の育成の難しさ」が挙げられている。資質・能力の育成を重視した、学習への意欲を高めるような教科指導の在り方を考えていくことが重要になる。

## 2. 生きる力と学力の構造

そこで、当センターでは、これから求められるであろう学力のとらえ方を明確にするために、「生きる力と学力の構造」を下記のように整理してみた。



「生きる力と学力の構造図」

変動の多い社会の中で必要とされる「生きる力」は、当然、「学校」「家庭」「地域」「社会」の中ではぐくまれるべきものであり、学校はこれら4者の連携の中核となることを求められているといえるだろう。そのようなことを受け、今後、学校教育の在り方は大きく変わらざるをえないであろう。当センターでは、学校と同心円状に家庭、地域、さらに社会を置き、その中心部に学校を置いた。それは、閉ざされた中での学校教育ではなく、互に関心をもち、子ども達が地域に出たり、家庭や地域が学校に積極的に関わっていったりするような開かれた学校教育が必要だと考えるからである。

そのように考えた場合、学校教育の中で求められている「生きる力」は、「学力」そのものと言い換えることができるであろう。なぜなら、子どもを取り巻く地域社会と関わろうとする意欲を含んだ「生きる力」を育成するためには、「問題解決能力」「豊かな人間性」「健康や体力」などが、各教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間の中で、意図的・計画的にバランスよく育成されていったものが、「学

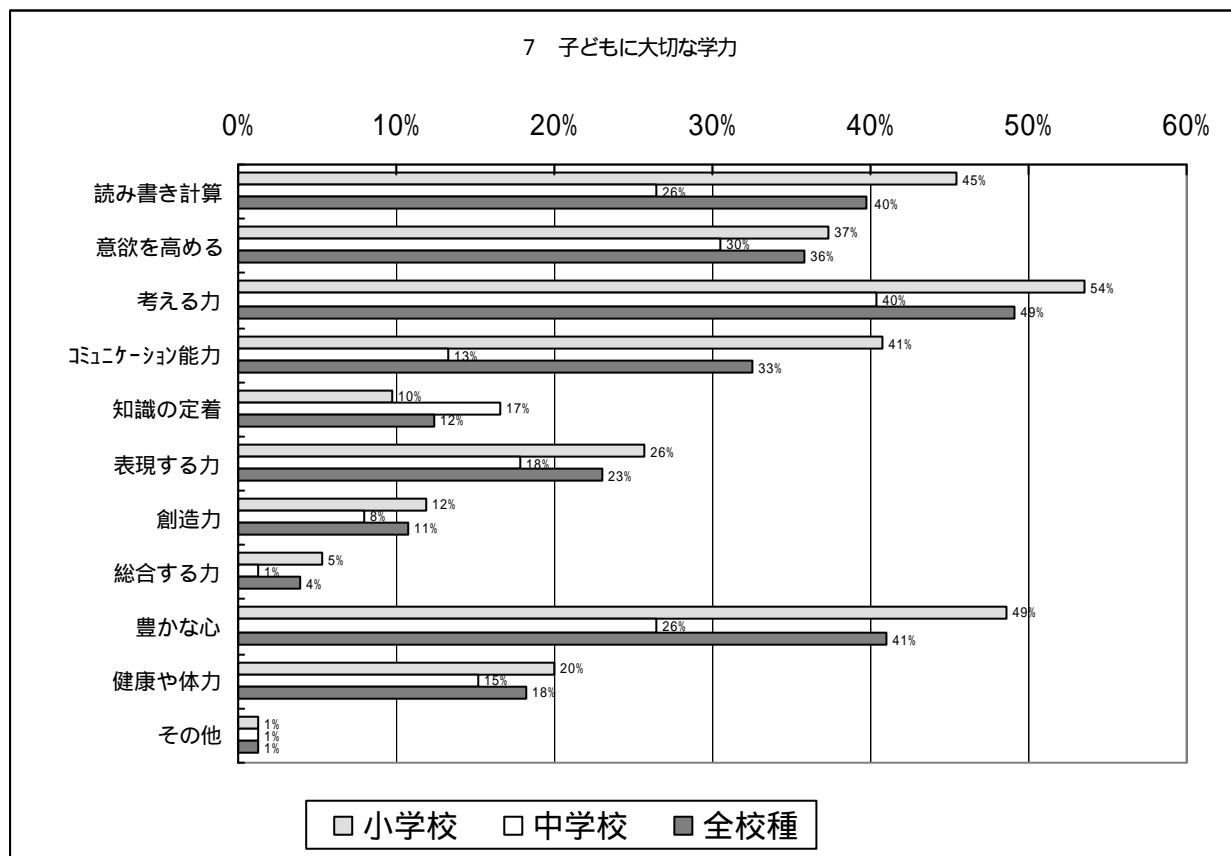
力」であると，とらえたからである。

### 3．教科における基礎学力の育成

#### (1)「教科における基礎学力」とは

「教科における基礎学力」を，どうとらえていけばよいのであろうか。「生きる力と学力の構造」( p. 6 )を土台としつつ，私たちの考える「基礎学力」についてもう少し詳しく述べていく。

「子どもたちに大切だと思う学力は何か」についてたずねた調査では，次のことが挙げられた。



小・中学校ともに「考える力」が四分の一を占めてトップであり，「豊かな心」「意欲」「読み書き計算」が次に続く。

学力の向上において，知識の重要性は言うまでもないが，これからは，知識もまた，考える力や豊かな心，意欲など，資質・能力に支えられたものでなくてはならない。

そこで，私たちは，「教科における基礎学力」を「知識を獲得する力」と，そこから「獲得される知」と考え，次のように整理した。

知識を獲得する力（資質・能力）として

- ・ 関心・意欲・態度
- ・ 思考力・判断力
- ・ 技能・表現力

獲得される知として

- ・ 知識・理解

「獲得される知」とは、知識・理解の獲得を最終目的とするのではなく、その知識・理解が次の学習に生かされていく、また、新たな発見を生み出していくというように、変化していくものと考えたからである。(上記のものに含まれるものは、教科の特性によって違ってくる。また、この形で分けられない教科も当然ある。)

ここでは、「知識を獲得する力」とそこから「獲得される知」を意識的に分けているが、教科における基礎学力はこれらの相互関係の中にあると、私たちは考える。(以下、「知識を獲得する力」を資質・能力と述べていく)

## (2) 資質・能力の育成と知識の獲得の仕方

21世紀の社会を担う子どもたちに求められている力を考えた時、従来のように知識の量だけが重視されるのではないことは言うまでもない。適用のできる知識、それも場面に応じて、また、必要に応じて使いこなせる知識の在り方を、改めて考えていく必要があるだろう。そのためには、それらを互いに関連させながら、つまり、知識を構造化していくことが必要になる。それを、私たちは、資質・能力と考えた。それは、対象そのものへの意欲や関心であり、考える力や判断力であり、目的に応じて使える技能や表現力であろう。そして、それは、教科の特性をもつものである。それらの力の育成を図ることが、子どもたちが自分自身の力で新たな知識を構築していくことにもつながると考える。さらには、子どもたちが、心豊かに生きていくことにもつながっていくと考える。

## (3) 具体的な教科における基礎学力について

具体的にいくつかの教科を例に挙げながら、知識を獲得する力としての資質・能力と、そこから獲得される知識について述べていく。

### 【中学校英語科の例】

英語科においては、言語の使用場面(situation)や言語の働き(function)を意識させながら、自分の考えや思いを伝えたり、相手の意向を理解したりの実践的・体験的な活動を行うことにより実践的なコミュニケーションのためのスキルが獲得されていくことになる。ここでの資質・能力は、コミュニケーションへの関心・意欲・態度、相手の意向を理解し、自分の考えや意見を表現する力であり、それを通して獲得される知は、コミュニケーションを図るためのある一定の話題についての知識やコミュニケーション能力になる。

その考えをもとに、英語科における資質・能力と獲得される知を下記に示す。

資質・能力	獲得される知
Communication Motivation and Sensitivity <b>コミュニケーションへの態度・意欲・関心</b> ・コミュニケーションに関心をもち、積極的に言語活動を行い、コミュニケーションを図ろうとする。 Skill <b>表現の能力</b> ・初歩的な外国語を用いて、自分の考えや気持ちなど伝えたいことを話したり、書いたりして表現する。 Skill	Knowledge 初歩的な外国語の学習を通して、言語やその運用についての知識を身に付けるとともにその背景にある文化などを理解している。



**理解の能力**

・初歩的な外国語を聞いたり，読んだりして，話し手や書き手の意向や具体的な内容など相手が伝えようとすることを理解する。

**【小学校社会科の例】**

社会科は，社会の状況や様子が対象になるため，時間が経つと変わりうる知識，地域によって変わってしまう知識では，将来に必ずしも生かされないことになる。調べる対象や事例は，学校によって，また，子どもによって違っていても，子どもの学習活動で育てたい資質・能力と獲得させたい知識は同じでなくてはならない。

社会科における資質・能力は，社会事象に関する関心・意欲・態度，社会事象に関する思考・判断，社会事象の調査・観察，及び資料活用の技能・表現である。これらを通して獲得される知が，知識・理解になる。

その考えをもとに，小学校5年の学習主題「我が国の農業や水産業について」の例を下記に示す。

資質・能力	獲得される知
<p><b>社会事象に関する調査・技能・表現</b>            ・我が国の食料の生産量，産地，土地利用について，地図帳や統計などで，様々なところから集まってきたことを調べ，その分類や分布を白地図等にまとめることができる。</p> <p><b>社会事象に関する思考・判断</b>            ・我が国の農業や水産業は，国民の食料を確保する重要な役割を果たしていることや自然環境と深いかわりをもつて営まれていることを考えることができる。</p> <p><b>社会事象に関する興味・関心・態度</b>            ・我が国の農業や水産業の発展に関心をもつて調べることができる。            ・環境の保全の重要性に関心を持つとともに国土に対する愛情をもつことができる。</p>	<p>・様々な食料生産が国民の食生活を支えていること，食料の中には外国から輸入しているものもあること</p> <p>・我が国の主な食料生産物の分布や土地利用の特色</p> <p>・食料生産に従事している人々の工夫や努力，生産地と消費地を結ぶ運輸の役割</p>

**【小学校理科における資質・能力と獲得される知の考え方】**

次に，小学校理科を例に，教科における基礎学力について資質・能力と獲得される知との関係について説明する。

小学校の理科A「生物と環境」においては，下記のように整理される。

3年生のA分野「生物と環境」では，動物や植物を対象としての学習が展開される。その中で，特に重視される資質・能力が「比較する力」である。さらに，「動物や植物を愛護する態度」の育成である。資質・能力によって獲得する知としては，「昆虫の育ちには一定の順序がある」ことや「昆虫の体は，頭，胸，及び腹からできている」などがある。

ここでは，資質・能力の育成と知識の獲得がそれぞれになされればよいというわけではない。この二つの関係性が重要になる。つまり，比較する力の育成のためには，いくつかの昆虫らしきものを調べる必要がある。違いについては簡単に見つけることができるが，共通点については，やや難しくなってくる。また，一つの視点での比較は簡単であるが，いくつかの視点での比較は高度になってくる。さらに，同時期での比較より，時間を追っての時系列的な比較は，その上のレベルになるであろう。そのようなことも踏まえながら，「比較する力」の育成を図っていく。そして，比較した結果，自分自身でとらえられていくことが，「昆虫の育ちには，一定の順序がある」等の知識

になる。これは、教えられた知識とは異なり、比較することでとらえられた自分の知識、自分で獲得した知になる。

そして、比較して追及する能力の育成や、自分自身による知識の獲得を通して動物や植物を愛護する態度が育ってくるのである。

3年A 生物と環境（対象：昆虫・植物）

資質・能力		獲得される知	
動物や植物を比較して追及する力 動物や植物を愛護する態度	<p><b>自然事象への関心・意欲・態度：</b>進んでつくりや育ち方、かかわりを調べようとする。</p> <p><b>科学的な思考：</b>昆虫同士や植物同士を比較して、差異点や共通点を見出すことができる。</p> <p><b>実験・観察の技能：</b>探したり、育てたりして器具を適切に使って特徴を観察し、記録できる。</p>	<p>昆虫の育ちには、一定の順序がある。</p> <p>昆虫の体は頭、胸、及び腹からできている。</p> <p>植物の体は根、茎、及び葉からできている。</p> <p>昆虫には植物を食べたり、それをすみかになっているものもある。</p>	昆虫と植物のかかわりについての見方・考え方

（４）教科における基礎学力の育成を図るための授業モデルプラン（中学校数学科）

「育成する資質・能力と獲得される知を考えた単元」

この単元で育成する資質・能力と獲得される知

「数学を身に付ける」に関しては、

- ・ 2つの数量について変化や対応の見方・考え方を身に付ける
- ・ 比例、反比例の見方や考え方を問題解決に利用できる
- ・ 比例、反比例の見方や考え方を進んで活用する態度

「数学をつくりだす」に関しては、

- ・ 事象の観察や実験操作から比例・反比例の関係を見つける力
- ・ 比例、反比例の見方や考え方を使って事象を考察する力

「数学を活かす」に関しては、

- ・ 日常生活や事象の考察と予測に比例・反比例の見方や考え方を活用する力

単元構成

比例「比例の関係、比例の特徴」

- ・ 新しい概念の導入段階で、主として学級全体で学習に取り組む

座標と比例のグラフ

- ・ 座標の概念を導入し、比例のグラフをかいてその特徴を調べる学習に取り組む

反比例「反比例の関係、反比例の特徴」

- ・ 比例の学習を生かし、個人や小集団で学習に取り組む

比例、反比例の見方や考え方の活用

- ・ これまでの学習を身の回りの事象の考察に活用する習に取り組む

個に応じた学習

- ・ これまでの学習を振り返り自ら課題を選択し、補充、活用・習熟、進化・発展のための学習に取り組む

## 「学習指導案」

学習指導案は、教育の方向性を映し出した鏡であるにとらえると、これまでにいくつかの改善が行われてきた。

現在の学習指導案は、おおむね“一人一人を大切にした学習指導”“子ども主体の学習指導”を柱に構成されていると考えられる。また、各教科における学習指導案の形態は、国立教育政策研究所の評価方法等の研究開発報告（2002年2月）の中で示されている例に準じている。

そこで、本研究の主題「教科における基礎学力の育成を目指して」に迫るために、「数学科における資質・能力の育成」の視点を学習指導案に反映させたいと考え、次のような提案をしたい。

数学的活動を通して、資質・能力を育成する立場から、本時の展開の欄に「望ましい数学的活動」の項目を追加する

総合的な学習の時間で培いたい資質・能力（平成13年度総合教育センター教育課程研究会議報告書参照）との関連を記述する

子どもの学習の実現状況の評価を評価規準とあわせた形で記述する

本時の展開（一部分）		改善点	改善点	改善点
学習のねらいと発問等	望ましい数学的活動	発問等に対する生徒の予想される反応	評価と支援	観点別評価および総合的な学習の時間との関連
[一斉指導] 1 課題の提示 課題の把握 2 本日の学習のねらい 「枚数を求めることが重要ではなく、枚数の求め方を考えることを確認する」	同じ画用紙がたくさん重ねて置かれています。太郎さんは、1枚1枚全部数えずに、画用紙のおよその枚数を知ることができないか考えています。あなたなら、どのようにして枚数を求めますか。			・ は、配慮事項 [総]は、総合との関連は、おおむね満足の視点 は、十分満足の視点

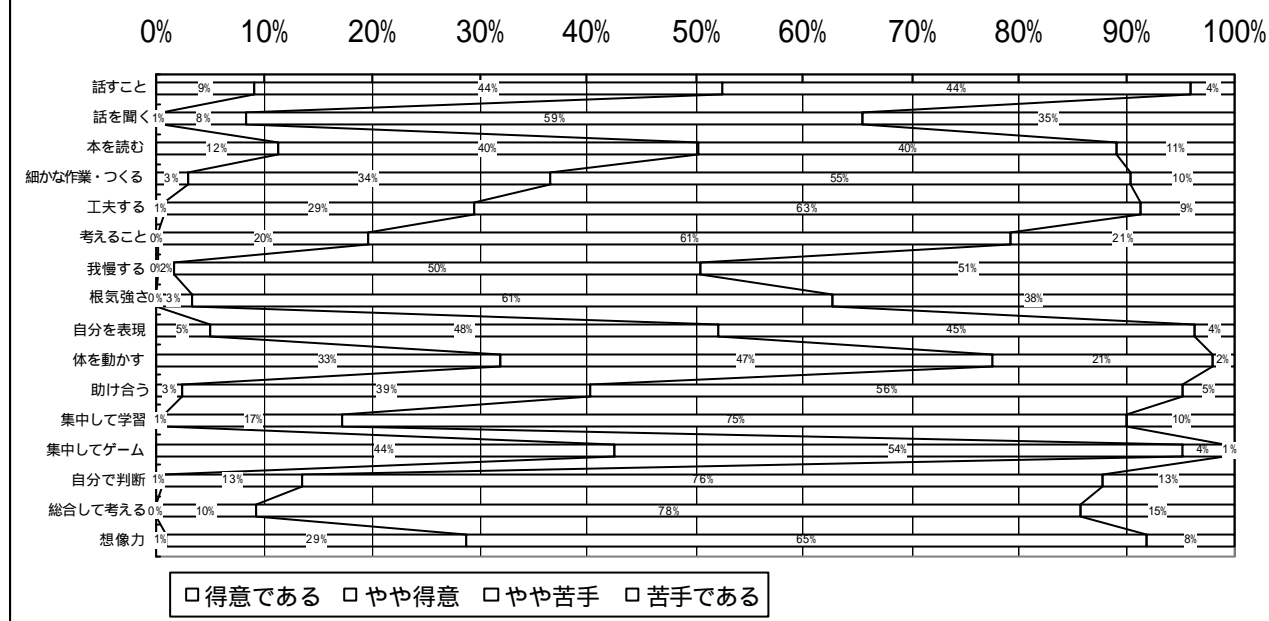
<p>3 【ともなって変わる2つの量の意識付け】</p> <p>発問「枚数と関係する量で、実際の画用紙の束にはどんな量があるだろう」</p> <p>・ 生徒の意見を板書する</p>	<p>【既習事項の確認】</p> <p>“関係する”という言葉に着目する</p> <p>枚数と関係している量を探す</p> <p>“ともなって変わる量”を思い出す</p>	<p>・ 挙手をして発表する</p> <p>1-1 重さ</p> <p>1-2 厚さ(高さ)</p> <p>1-3 体積</p> <p>1-4 面積</p>	<p>1-1 数量関係の量の把握ができている</p> <p>1-2 “ ”</p> <p>1-3 “ ”</p> <p>1-4 表面積ではない場合は、対応する量が把握できていない。他の量に目を向けさせる</p>	<p>【総】 学び方やものの考え方 「観察力」</p> <p>【総】 主体的・創造的な態度の「知的好奇心・探究心・意欲」</p> <p>おおむね満足の視 十分満足の視点 } 例</p>
<p>[班単位でのグループ]</p> <p>4 解決方法の検討1 【数量関係の把握】</p> <p>発問「枚数と関係する別の量を測って、枚数を求めることを考えよう」</p> <p>・ 班ごとに小黒板で発表</p>	<p>【問題解決を考慮した事象の考察】</p> <p>実際に測定が可能である2つの量に着目する</p> <p>枚数を求めることを考えて、ある規則に従って変わる量に着目する</p> <p>測定しやすい量に着目する</p> <p>班のなかで活発な意見交換を行う</p>	<p>・ 班ごとに考えた結果を小黒板に記入し、掲示する</p> <p>1-1 1枚の重さがわかれば、全体の枚数が求められる 10枚分の重さがわかれば、全体の枚数が求められる</p> <p>1-2 1枚の厚さがわかれば、全体の枚数が求められる 10枚分の厚さがわかれば、全体の枚数が求められる</p> <p>1-3 測ることが困難な量に注目している</p> <p>1-4 活動が止まっている</p>	<p>・ 根拠も説明できるように促す</p> <p>1-1 数量関係が把握できているが、1枚の重さを測ることが困難であり、考えを深めさせる</p> <p>1-2 数量関係が把握できているが、1枚の厚さを測ることが困難であり、考えを深めさせる</p> <p>1-3 他の数量に着目させる</p> <p>1-4 枚数が変わるとともなって変化する量に着目させる</p>	<p>【関心・意欲・態度】 比例の見方や考え方を活用しようとしている 表、式、グラフなどを用いて簡潔・明瞭に表現し能率的に調べようとしている</p> <p>【見方や考え方】 比例関係を利用して、間接的に数量を測定する方法を指摘できる 比例関係を利用して、間接的に数量を測定する場面を指摘し、求めた表・式・グラフなどからどんなことが言えるかを考えることができる</p>
<p>学習のねらいでは、[課題の提示][課題の把握][解決方法の検討(含む根拠の確認)][課題の解決][結果の比較][結果の確認とまとめ]の段階を設け、問題解決的な学習を基本的な指導方法にすえている。また、学習指導要領の改訂で、数学科の目標に加えられた「数学的な活動」を“単にでき上がった数学を知るのではなく、事象を観察して法則を見つけ、その性質を明らかにしたり、具体的な操作や実験を試みることを通して数学的内容を帰納したりして、数学をつくりだし発展させる活動”と定義した。生徒の学習活動をいかに数学的活動に高めていくかを学習展開の基本としている。</p>				

## 5 教科の基礎学力を支えるもの

これまでの「教科における基礎学力」の重要性について述べてきたが、現実の子どもたちを見ていると、授業の充実だけでは難しいものがあるように感じる。子ども本来の姿は、昔とは変わらないのであろう。しかし、取り巻く環境や社会の変化から、子どものある部分については確かに変化しているといえるのではないが。

最近の子どもたちについて感じていることの調査からは、次のようなことがとらえられている。

8 最近の子どもたちの得意なものは(全校種)



小・中学校ともに得意なことは、「集中してゲームなどで遊ぶこと」「体を動かすこと」「自分を表現すること」である。反対に苦手なことは、「我慢する」「根気強さ」「話を聞く」であった。

最近では、ゲームなどで楽しむことには集中力を示し、メディアなどの影響なども受け、サッカーやバスケット、ダンスなどリズム感よく体を動かすことが得意であるととらえられる。また、自分を表現することも同様である。

しかし、じっと我慢することや根気強く取り組むこと、黙って話を聞くことなど、自己の内面をコントロールすることが苦手だということが分かる。最近、子どもたちが学びから逃げ出しているといわれるが、この辺りにも原因の一つがあるのではないだろうか。

高階玲治氏（ベネッセ教育総研東京所長）の言葉を借りると、学力の育成とともに「学習力」の育成をも図っていく必要がでてきているのである。

そこで、基礎学力を支えるものとしての「学習力」を、当センターでは以下のようにまとめてみた。

**【教科の基礎学力を支える学習力】**

学 習 基 盤	生 活 基 盤
根気強さ 継続性 集中力 協調性 想像力 我慢強さ 自己をコントロールする力 感動する心 学ぼうとする意欲 など	生活のリズム 時間を守る 整理・整頓の習慣 ものを大切にする態度 人やものへの愛着 心の安定 社会的なマナー など

生きる力の中核となる教科における基礎学力の育成を図るために、上記のような「学習力」の育成

にも意識して取り組むことが重要になる。今後は、その「学習力」も含めた教科指導の在り方を研究していく必要がある。

「教科における基礎学力」について整理することで、今まで述べてきたことをまとめてみる。私たちの考える「教科における基礎学力」とは、

意図的・計画的に育成される学力である。

「生きる力」は、家庭や社会の中でも育成されるが、その中核となる「教科における基礎学力」は、学習指導要領のもと、意図的・計画的に育成されなければならない。

資質・能力を中心とした学力である。

知識を獲得させる場合も、資質・能力の育成を図りながら行わせることが重要になる。

学校生活や家庭・社会生活と相互に働き合う学力である。

閉じた教科の中でのみ育成するものではなく、学校における体験のすべてと相互に働き合うことを意識して育成していくものである。

学習力を基盤として獲得する学力である。

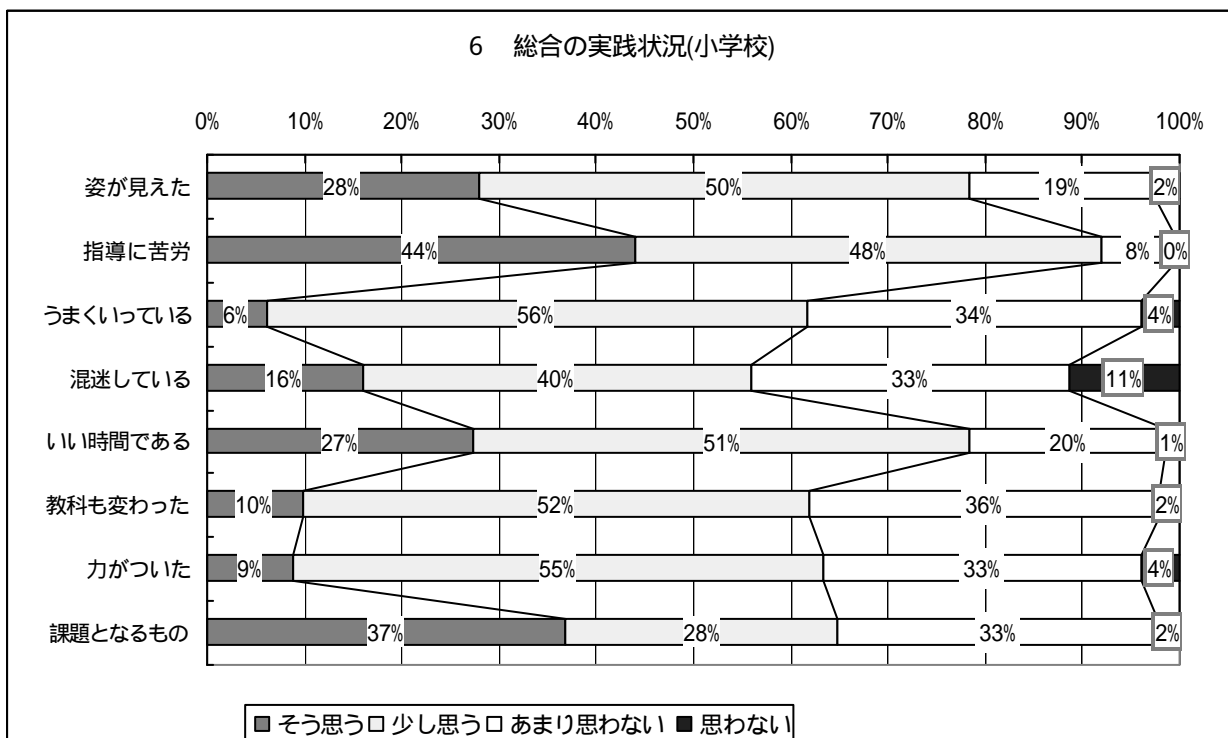
基礎学力の育成を図るためには、それを支えるための根気強さや集中力などの力もまた育成していく必要がある。

## 6．相互に育成するものと生きる力

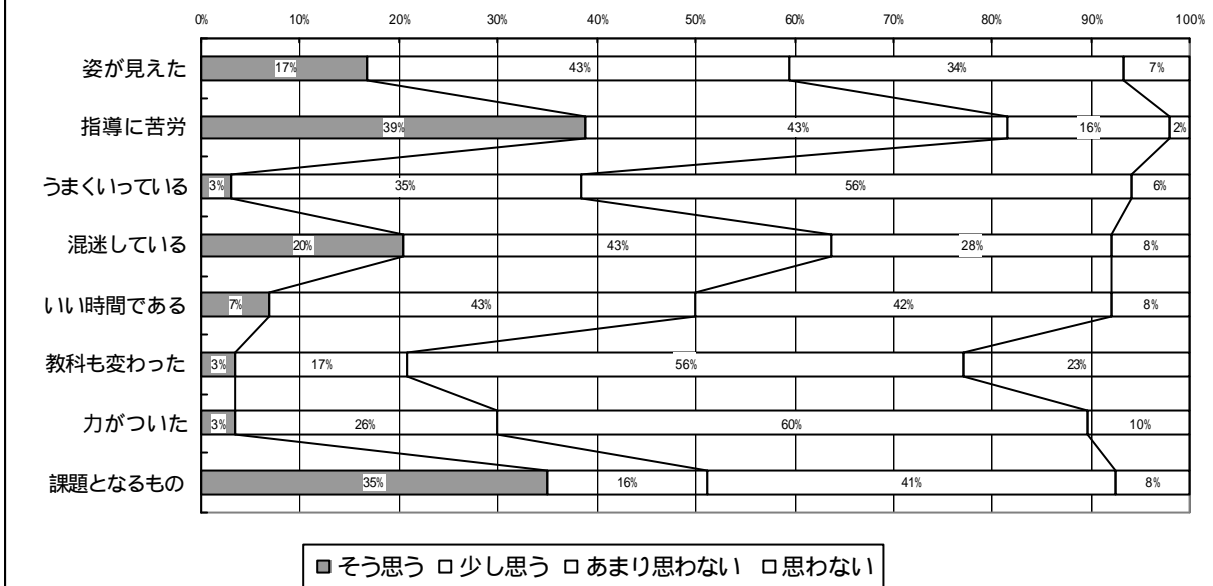
### (1) 総合的な学習の時間と教科の関係

子どもたちに「生きる力」としての真の学力を育成していくためには、教科と総合的な学習の時間を関連して考えていくことが求められている。その相互の関係をいかに価値あるものに高められるかが、学力向上のための要となるであろう。

移行期から3年を経て、実践が積み重ねられてきた総合的な学習の時間について、各学校では次のようなことを感じているようである。



## 6 総合の実践状況(中学校)



小学校においては、学級担任制のため、また、生活科の取組があって実践が先行していたため、「指導に苦勞している」もあるが、「姿がみえてきた」「いい時間である」というプラス面が上位を占めている。中学校においては、「姿がみえてきた」もあるが、「指導に苦勞している」「混迷している」というマイナス面も多く上位に上げられている。教科担任制である中学校においては、取組にあたってまだ多くの課題を抱えていると思われる。

また、小学校からは、「混迷している」もあるが、「子どもに力がついている」「他教科の授業の在り方が変わった」という成果も挙げられてきている。これからは、学校全体のカリキュラムとともに、そこでの力の育ちに目を向けながら、教科との関連で育成されていくものを実践の中からとらえていく必要がある。

### (2) 総合的な学習の時間の評価

教科の基礎学力を育成していくためにも、総合的な学習の時間と教科の関係を密接にしていくことが大切になる。そのためには、教科だけではなく、総合的な学習の時間における子どもの育ちもしっかり見ていく必要がある。

教科の評価については、【指導と評価】討議資料(2001年11月川崎市総合教育センター)で、すでに示したので、総合的な学習の時間での力の育ちについて、若干、考察してみたい。センターでは3年間にわたり、高津小学校と西高津中学校に共同研究校をお願いしている。平成12年度には、小学校で培われた総合的な学習の時間での力を、中学校においても積み重ねていく必要性から、「培いたい力」の育成のための小・中学校連携の可能性を探ってみた。同じ地域内にあることで体験はかなりリンクしていたため、両校の実態の情報交換をもとに、両校で共通する願いを整理し、互いの総合的な学習の時間での力の連続を考えて、小・中学校9年間を見通した「培いたい力の系統図」を作成した(センター平成12年度研究紀要参照)。平成13年度には、前年度整理した9年間を見通した「培いたい力」

をもとに、多摩川を題材とした具体的な単元のモデルプランを、小学校、中学校において作成した。さらに、そのモデルプランには、総合的な学習の時間で培う力と、各教科等で育成した資質・能力の関連を位置付け、互いの資質・能力の向上を図った。

そこで、今年度は、今までの研究を経て、両校における総合的な学習の時間で培っていく力の伸びを、どのように見ていくか、という評価について研究を進めた。今年度の研究の主な柱は、

両校で共通して培う力の評価と支援の具体例

連続した9年間の力の育成を図るためのカルテづくり である。

## 研究のまとめ

共同研究校である、高津小学校、西高津中学校の協力を得ながら、3年間の研究の中で、「総合的な学習の時間」「教科と総合的な学習の時間の関連」「教科における基礎学力」についての研究を進めてきた。今後は、この研究をもとに、それぞれをどうバランスよく教育課程の中に位置づけ、その学校の実態に合わせた形で具現化していくかであろう。新しい教育について探りながら、小・中学校9年間を見通した中でのカリキュラム編成の在り方が重要になる。

また、今年度、特に重点をおいて研究した「教科における基礎学力」については、これから求められている学力のとらえを明確にした上で、具体的にその育成を図っていく必要がある。その中で、一人一人の子どもたちがも強さを生かしながら、子ども自身が知を獲得していくという目的をもって資質・能力を育成する授業の充実を図っていく必要がある。

さらに、人とのかかわりの中で学びの質を高めることや、友だちの価値を認め自分自身をもみつめていけるような、豊かな人間性をはぐくむ教科指導を目指したい。それが、これから求められている学力の向上につながることであろう。

来年度、学習指導要領の実施の2年目を迎えるにあたり、実践を通して、より具体化した研究の必要性を感じる。今後、川崎の子どもたちの実態をとらえながら、子どもたちに確かな学力・生きる力をつけていくために、授業実践を通しての研究開発を進めていきたいと考えている。

本研究を進めるにあたり、適切にご助言をいただいた先生方、研究を支えてくださった共同研究校の高津小学校・西高津中学校の校長先生はじめ諸先生方に、心より感謝申し上げます。

### 【参考文献】

- |   |       |
|---|-------|
| 小学校教育課程一般指導資料『新しい学力観に立つ教育課程の創造と展開』東洋館出版 | 1993年 |
| 安彦忠彦『新学力観と基礎学力』                         | 1996年 |
| 佐藤学『学びから逃走する子どもたち』岩波ブックレット              | 2001年 |
| 藤田英典『教育改革 - 共生時代の学校づくり - 』岩波新書          | 1997年 |
| 梶田叡一『基礎基本の人間教育を』金子書房                    | 2001年 |
| 中央公論編集部・中井浩一『論争・学力崩壊』中公新書ラクレ            | 2001年 |
| 苅谷剛彦『教育改革の幻想』ちくま新書                      | 2001年 |
| 小松夏樹『ドキュメント ゆとり教育崩壊』中公新書ラクレ             | 2002年 |

### 【指導助言者】

国立教育政策研究所総括研究官（川崎市総合教育センター専門員）

工藤 文三